東横町集会所（旧木之本保健所）（長浜市木之本町木之本）

赤い桟瓦が愛らしい町の集会所

▲まちなみにしっくりなじんだ赤い桟瓦と煉瓦造りの玄関

古い商家が建ち並ぶ北国街道木之本宿の東側、長浜市立木之本中学校の角を曲がると平屋の切妻屋根の洋館が顔をのぞかせる。こげ茶色の下見板張に赤い桟瓦（さんがわら）、切妻屋根の下にアクセントのように並んだ梁、ブルーグレイに塗られた引き違い戸、その上に見えるちいさな木枠の窓、そして玄関をくるりと囲んだオレンジ色の煉瓦、20m近くもある広い間口が少しも威圧的に感じられないのはそんな愛らしい色合いと木造の温もりのせいだろう。

この建物が建てられたのは戦後まもない昭和23年（1948）のこと。「公衆衛生の向上は欠くべからざるものなり」と謳われた新しい保健所法のもと、滋賀県立木之本保健所として伊香病院（現・木之本中学校）の真向いに建設されたのである。その後、昭和27年に標準保健所規格施設として整備するため、会議室と診療室が増室、次いで昭和37年には直接・断層のレントゲン設備を導入するためのX線室が増室された。さらにその後も食生活改善指導を行うための栄養指導室が作られるなど、幾度もの増改築が繰り返され、現在の建坪142坪（484・45㎡）、T字型の平面をもつ建物に至ったのである。

現在、この建物の玄関には「東横町集会所」と書かれた看板が掛けられている。昭和58年、木之本保健所が木之本町黒田へと移転したことに伴い、保健所の建物は自治会に引き継がれ、東横町の集会所として活用されるようになったのである。

玄関の扉を開くと受付のちいさな窓と手洗い用の洗面台、待合に使われていたと思われる水色のベンチが迎えてくれる。現在は集会所として活用されてはいるものの、ほとんど手が加えられていないため、タイムトリップしたような心地がする。

打ち放しコンクリート、ブルーグレイに塗られた木の腰板、廊下沿いには診察室らしき部屋や調理室が残り、その奥には木製のレントゲン装置を備えたX線室がある。廊下の天井は白漆喰だが、部屋の天井はブルーグレイに塗られ、その隅には換気の役目を果たしていたと思われる透かし彫りの板が張られている。目に入る色彩は漆喰壁の白と木材に塗られたブルーグレイの2色のみ。保健所という機能上、いたってシンプルな造りだが、2段の大きな木枠のガラス窓が開放感を醸し出している。

「この地域で一番熱心に活動されているのがこの東横町の老人会なんですよ」。延寿会と書かれた部屋を開けながら、町内会長の藤田喜代隆さんが相好をくずした。壁には老人会の活発な活動の記録がずらっと並ぶ。

保健所は今も変わることなく地域の人々とともに生きている。

（ひろ）

▲北側の妻側には、縦長の窓が並ぶ

▲診療所時代から使われていたようなベンチ

▲部屋の天井の隅には透かし彫りの板

▲ブルーグレイと白だけのシンプルな色空間

建築年　昭和23年（1948）
設計・施工　不詳
構造　木造平屋建（一部煉瓦造）　寄棟造　瓦葺き

長浜市役所本館

苦難の末に完成した市のシンボル

▲シンメトリックな外観。「活力と風格の」という看板が似合う

長浜市役所の本館は、戦後間もない頃に竣工している。物資の調達も困難な時代。大きな財政支出に当時の意見は二分。建設に関わった人たちにとっては、苦労を重ねた末の念願の市庁舎だった。

市制施行後も旧町役場が庁舎に

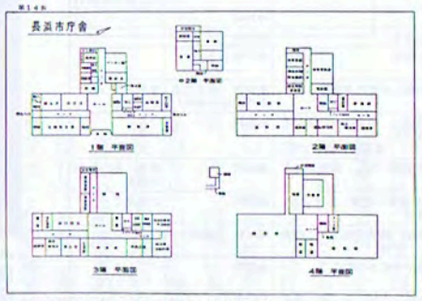
長浜市の市制が施行されたのは昭和18年（1943）4月。同年2月に、長浜市港町にある慶雲館で7町村の合併促進委員会が開かれ、市役所の位置を長浜市高田町とすることが決定された。慶雲館は、明治20年（1987）に長浜の豪商浅見又蔵が明治天皇の休憩所として建てたものだが、昭和11年（1936）に当時の長浜町へ寄付されていた。

この合併促進委員会では、当時の長浜町が協賛会を結成して集めた募金30万円余を、新市庁舎建設費の一部にと寄付することも決められている。

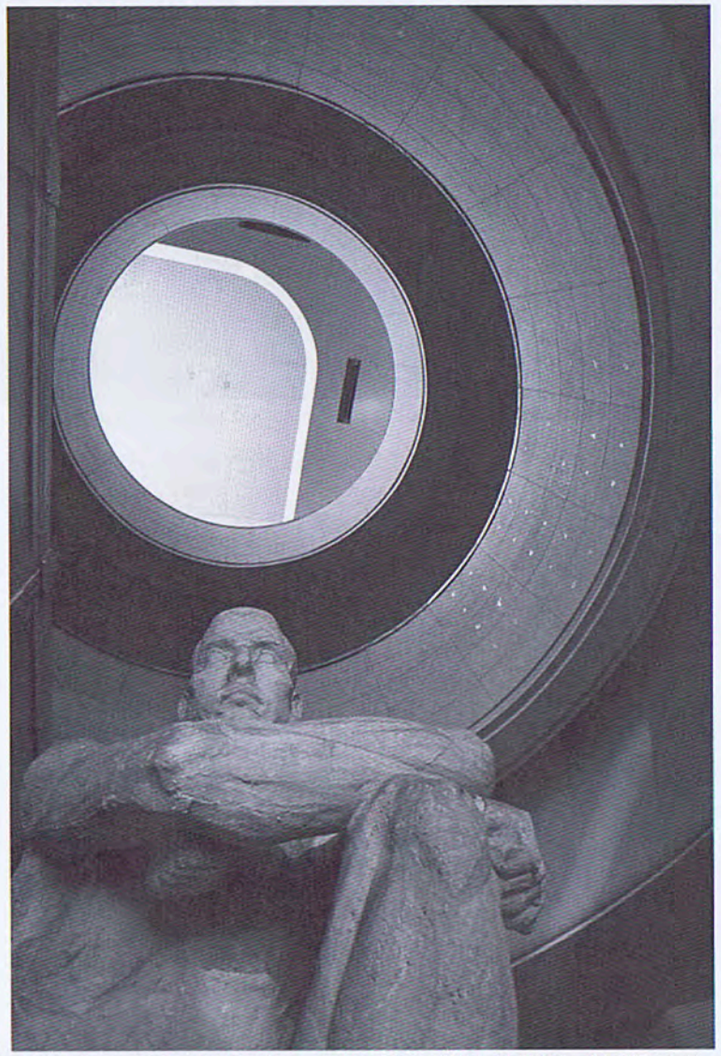
当時、長浜市の市制施行は大津市・彦根市に次いで県下で3番目、人口と面積では2番目という規模。しかし戦時中の物資が乏しい時代のこと、当面は長浜市西本町（現元浜町）の旧長浜町役場を仮庁舎として使うことになった。この建物は、昭和6年（1931）に建てられた木造瓦葺2階建の庁舎で、長浜駅前通りから北国街道を北へ入る西側の角にあった。

戦争末期には、市役所の一部は西本町から郊外へ疎開していた。戸籍課や財務課、税務課など第1分室が八幡東町へ、土木課と産業課の第2分室が勝町にといった具合だ。

▲完成間近の市庁舎。外装がまだの時期。東に伊吹山が望める



▲昭和42年当時の市庁舎配置図



▲ホールから見上げた吹き抜け。中央に「座せる男像」（中澤安雄・作）が置かれる

▲1階の市民課窓口

▲階段の装飾と踊り場の照明が美しい

駅前道路の拡張工事で庁舎移転

そんな混乱の時代を経て終戦を迎える。国の勅裁により選任されていた前川鬼子男市長は辞職し、市会議長の加田桂三が臨時市長代理者に就任。昭和22年（1947）4月に選挙がおこなわれ、加田が初の公選市長になった。

戦後、GHQの民主化政策により行政経費は膨らみ、加えて市民の要望は拡大していく。小中学校の校舎建設、保育所や消防署の建設、幹線道路の整備など、大きな財政支出を伴った。市庁舎の建設は後回しにされていたが、昭和25年（1950）に駅前道路の拡張工事が始まり、いやがうえでも市庁舎は移転せざるを得なくなった。

そして、翌年3月の市議会で3年間の庁舎建設予算として総額6千万円が可決される。建物規模は、鉄骨鉄筋コンクリート造り3階建一部4階建。すぐに工事の入札がおこなわれ、株式会社安藤組大阪支店と請負契約を結ぶ。安藤組は明治5年（1872）に東京で創業し、東京銀座街の煉瓦建築などを手がけた老舗の会社で、現在は間組と合併して株式会社安藤・間という社名になっている。

当時、市の議事堂は長浜駅前広場の北側にあったが、郵便局舎として貸していた。その土地と建物を郵政省に売却することで、庁舎建設の財源の一部に充てることができる。とはいっ